

葡萄棚

永井荷風

青空文庫

浅草公園の矢場銘酒屋のたぐひ近頃に至りて大方取払はれし由聞きつたへて誰なりしか好事の人の仔細らしく言ひけるは、かかるいぶせき処のさまこそ忘れやらぬ中絵にも文にもなして写し置くべきなれ。後に至らば天明時代の蒔蕪本とも相並びて風俗研究家の好資料ともなるべきにと。この言あるいは然らん。かの唐人孫縈が『北里志』また崔令欽が『教坊記』の如きいづれか才人一時の戲著ならざらんや。然るに千年の後、今なほ風流詩文をよろこぶもの必ずこれを一読せざるはなし。われさきに「大窪多与里」と題せし文中いささか浅草のことを記せり。その一節に曰く、

楊弓場の軒先に御神燈出すこといまだ御法度ならざりし頃には家名小さく書きたる店口の障子に時雨の夕なぞ榎の落葉する風情捨てがたきものにて※ひき。その頃の辺の矢場の奥座敷に昼遊びせし時肱掛窓の側に置きたる盃洗の水にいかなるはづみにや屋根を蔽ふ老樹の梢を越して、夕日に染みたる空の色の映りたるを、いと不思議に打眺め※事今だに記憶致をり※。その頃まではこの辺の風俗も若きは天神鬚三ツ輪またつぶしに結綿なぞかけ年増はおさふねお盥なぞにゆふもあり、絆纏のほか羽織などは着ず伝法なる好みにて中には半元服の凄き手取りもありと聞きし

が今は鼻唄の代りに唱歌唄ふ田舎いなかの女多くなりて唯わけもなく勤めすますを第一と心得※故遊びが楽になりて深く迷込む恐れもなく誠に無事なる世となり申※。

後藤宙外ごとうちゆうがい子しが作中たしか『松葉かんざし』と題せし一篇あり。浅草の風俗を描破する

事なほ一葉女史いちようが『濁江にごりえ』の本郷丸山ほんごうまるやまにおけるが如きものとおぼえたり。天外子

が『楊弓場ようきゆうばの一時間』は好箇の写生文なり。『今戸心いまだしん中』と『浅瀬の波しんじゆう』に明治時

代の二遊里を写せし柳浪りゅうろう先生のかつて一度も筆をこの地につけたる事なきはむしろ

奇なりといふべくや。『湯島詣ゆしまもつで』の著者また浅草を描きたることなきが如し。

巷ちまたに秋立ちそめて水菓子屋の店先に葡萄ぶどうの総涼ふさしき火影ほかげに照さるるを見る時、わが身に

はいつも可笑おかしき思出おもひでの浮うび来るなり。およそ見る物同じといへども見る人の心異ことなればそ

の趣もまた同じからず。一茶いつさが句には

一番の富士見ところや葡萄棚

といふがあり。葡萄の棚より露重げに垂れ下る葡萄を見上みあれば小暗おくらき葉越しの光にその総ふさ

の一粒一粒は切子硝子きりこガラスの珠たまにも似たるを、秋風のややともすればゆらゆらとゆり動すさま、

風前の牡丹花にもまさりて危しくいたましくまたやさしき限りなり。

島崎藤村しまざきとうそん子しが古き美文うちの中にも葡萄棚のこと記せしものありしやに覚ゆ。

今わが胸に浮^{うかび}出^{いづ}る葡萄棚の思出はかの浅間^{あさま}しき浅草にぞありける。二十^{はたち}の頃なりけり。どんよりと曇りて風なく、雨にもならぬ秋^{いちにち}の一日、浅草^{せんぼう}伝法院^{でんぽういん}の裏手なる土堀^{どべい}に添^そえる小路^{こうじ}を通り過ぎんとして忽^{たちま}ちとある銘酒屋^{めいしゅや}の小娘^{こむすめ}に袂引^{たもと}かれつ。大きな潰^{つぶ}島^{しま}田^{まだ}に紫色^{むらさき}の結綿^{ゆいわた}かけ、まだ肩^{かた}揚^{あげ}つけし浴衣^{ゆかた}の撫^な肩^{かた}ほつそりとして小づくりなれば十四、五にも見えたり。氣の抜けし麦酒^{ビール}一杯のみて後娘^{のち}はやがてわれを誘^{いざな}ひ公園の人込の中をば先に立ちて歩む。その行先いづこぞと思へば今区役所の建てる通^{とお}りの中ほどにて、町^{まち}家の間^{ちや}に立ちたる小さき寺の門なりけり。門^{うち}の中に入るまで娘は絶えず身のまはりに氣をくばりてゐたりしが初めて心おちつきたるさまになりてひとわが身に寄添^よひて手を取り、そのまま案内も請^こはず勝手^{かつてぐち}口^{くち}を廻^くりて庫裡^{くら}の裏手に出づ。と見れば葡萄棚ありてあたり薄暗^{はなれざしき}し。娘は奥まりたる離座敷^{はなれざしき}とも覺^ひしき一間の障子外より押開きてづかづかと内に上^{あが}り破^ふれし襖^{ふすま}より夜のもの取^{とり}出して煤^{すす}けたる畳の上に敷きのべたり。

あまりといへば事の意外なるにわれはこの精^{しょう}舎^{じや}のいかなる訳ありてかかる浅間^{あさま}しき女^{かくれが}の隠家^{かくれが}とはなれるにや。問はまく思ふ心はありながら、また寸時も早く逃^{のが}れ^{れい}でんと胸のみ轟^{とどろ}かすほどに、やがて女はわが身を送出^みでて再び葡萄棚の蔭を過ぐる時熟^みれる一^{ひと}總^さの取分けて低く垂れたるを見、栗鼠^{りす}のやうなる声立ててわが袖を捉へ忽ちわが背に攀^よ

ぢつ。片腕あらはに高くさしのべ力にまかせて葡萄の総を引けば、棚おそろしくゆれ動き
て、あぶ 虻あまたとびいづ 飛出る葉越しの秋の空、薄く曇りたれば早やたそがるるかと思はれき。本
堂かたの方に木魚もくぎよ叩く音いともものう 懶し。

われその頃より友人に教へられてかのモオパッサンが短篇小説読み始むるほどに、曇り
し日の葡萄棚のさま、何となくなに 彼のか 文豪が好んでもものする巴里パリナワンチュールの好事の中にもありげ 気なる
心地せられて遂に忘れぬ事の一つとはなりけり。怪しきかの寺なほありや否や。

大正七年八月

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〇五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

※ルビは新仮名とする底本の扱いにそつて、ルビの拗音、促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

葡萄棚

永井荷風

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>